KSKP まねき猫通信　100ぴきめ　第３種郵便物承認　通巻8778号　2010年11月2日発行　（1）

編集人：ぷくぷくの会　〒564-0025 吹田市南高浜町1-17-2A（総務）
TEL 06-6317-5598、FAX 06-6317-0936 Mail：so-mu@puku-2.com URL：www.puku-2.com
代表：馬垣安芳　編集長：上田かおり　1部200円
年間購読料：個人会員2000円　広報会員（３部）5000円
法人会員1口（5部）10000円　賛助会員（1部）10000円
振替口座 00940-0-161341
「まねき猫通信」

まねき猫通信

100ぴきめ

題字：
塩澤 文男
（しおざわ・ふみお）

もくじ

特集：雑誌『そよ風のように～』創刊31年　2
リレーエッセイ：何度でもチャレンジできることが大事---村上博　4
検察の暴走止めなかったメディアと裁判所---石塚直人　5
吹田の生き物と人-ケヤキ--高畠耕一郎　6

公園にて…

絵：つよしゆうこ

トリの眼・ムシの目・ニャンコの目

「新世紀の幕開けだ。しかも千年に一度のミレニアム」と、浮かれはしゃいだのも一昔前のこと。「21世紀は平和と人権の世紀」だと何度聞かされたことか。もちろん、戦争に明け暮れた20世紀を慮って「新世紀こそは良い時代になってほしい」との願いが込められた言辞だったのだろうが、現実はあまりにも「非・平和」「反・人権」的様相だ。その中にあって理想のみを云々すれば、かえって過酷な現実が肯定されるという皮肉しか生まない▲環境破壊、人間の機械化、生活と社会のデジタル化、この三つの現実は、私たちをどこへ連れて行くのだろう。一方で「環境保護、人間回復、生活と社会の再構築」を訴えても、どこか虚しくなぜか切ない。「エコ」がすでに資本の生存戦略であり、多文化共生は国家の施策だからだ。「人間らしさ」の規定すら資本と国家に牛耳られているのが21世紀だ、と肝に銘じておこう。その上でなお「人類の滅亡か共存か、第三の道はない」と、唱え続けたい▲地球という大きな生命体からすれば、人間など癌細胞に等しい。誰が言ったか「人間がいなくなれば環境問題は即時に解決する」と。確かにそうだ！それで、本当に、それでいいのかしら？　秋の夜長に、この「新十年」を恨めしく思う霜月――。（パギ）

『そよ風のように街に出よう』創刊31年を振り返る

「転換期」だからこそ伝えたいことがある

障害者問題資料センター・りぼん社代表　小林敏昭さん

１００号記念インタビューは、小林敏昭さんです。りぼん社は、１９７９年の創刊以来、31年間で79号の雑誌と10数冊の著作を刊行し、障害者解放運動のメッセージを伝え続けています。「まねき猫通信」も、今後を考える上で、先輩としてヒントをもらえると思います。編集者という立場で障害者運動に関わってこられた小林さんに、30年間を振り返ってもらいました。（編集部）

タブーを破る企画　誰でも読める雑誌

入部：まず、『そよ風のように街に出よう』発刊の目的と当時の運動状況をお聞かせ下さい。

小林：創刊号は、入部さんの出産・子育てを取り上げました。脳性麻痺の女性が結婚し、新たな命を得たことを通して、障害者にとっての家族や自立の意味を問う特集です。

重度障害者でベッド型車イスで生活する男性のヌード写真を掲載したこともあります。これらは、「障害者の性」というタブーを破る企画でした。

「青い芝の会」（脳性麻痺障害者の当事者組織）が、分裂していく中で、「障害者解放運動をもう一度立て直すために何ができるのだろう」と問い続け、雑誌創刊が決まりました。

しかし、障害者の多くは、義務教育からも排除されていました。このため、小難しい言葉がたくさん出てくるような理論誌では、障害当事者が参加しにくいし、たくさんの人にも読んでもらいたくて、誰でも読める雑誌として創刊されました。

入部：創刊前に発起人の河野さんが、出版資金カンパを取りに来たことがありました。生活保護で生活していた私は「そんな金ない」と断ったのですが、しつこく説明を続けるのです。もの凄い熱意に根負けして、10万円出資しました。（笑）

小林：「自分たちのための雑誌を作ろう」と障害当事者にも呼びかけ、全国紙でも、「画期的な障害者雑誌創刊！」と大きく取り上げられました。当時の障害者問題の雑誌は、施設の職員や市民運動の活動家を対象にしたものくらいしかなく、「障害者自身の声を基にした、誰でも読める雑誌」として、全国から購読申し込みが殺到しました。

▶小林敏昭さん（りぼん社にて）

▶創刊当時と最新号（左）。ぷくぷく通販と合わせてご注文ＯＫ。７００円

変革模索期に　議論の場を提供

小林：80年前後というと、社会運動全体は停滞期でしたが、障害者運動は養護学校義務化反対運動（78年）が盛り上がり、国際障害者年（81年）へと繋がっていく変革模索期でした。

特に関西では、施設や家から出て自立生活を始める障害者がたくさん現れ、介護者が不足するくらいでした。当時は、介護保障などの福祉制度は未整備でしたので、介護者は全くの手弁当で「解放運動」への関わりを問われ、自らに問うことが求められました。しかし、そういう運動は中身が濃い反面、継続することが困難です。

介護者不足で地域生活を営めないという現実問題に突き当たり、新たな議論と実践が必要とされていた時期でした。

入部：「青い芝の会」も分裂します。当時、青い芝では、「介護者は、障害者の手足となるべきだ」との考え方が、大きな議論となりました。障害当事者の主体を尊重せよ！という趣旨ですが、健常者と障害者がお互いに変わり合ってこそ、解放へと向かうはずです。「介護者手足論」に反対した私は、除名処分を受けました。

小林：『介護者手足論』は青い芝の思想的核心の一つだ」という人がいますが、それは間違いです。青い芝の創始者・横塚晃一さんらは、「障害者も健常者性をもっている。障害者自身も変わらなければ解放はない」と、相互変革論を強調しています。「介護者手足論」は、介護者不足で厳しい時期に、苦し紛れに出されたスローガンだと思います。

80年代に入ると公的介護保障要求者組合が結成され（88年）、アメリカで生まれたＣＩＬ（自立生活運動）を日本に定着させる運動も関東から広がります。

私たちは、公的介護保障の要求やアメリカ型運動とは少し距離を取りながらも、「青い芝の会」をはじめとする日本の障害者解放運動が培ってきた思いや実践をベースに、共に生きる社会をどう創っていくのか？との問題意識で、今もやっています。

「命」の価値に　重い軽いはない

入部：年４回発行で出発しましたが、発行状況はどうですか？

障がい者差別を変えていく関係

入部　香代子

私は、心の中に閉まってきた、伝えきれないものがあります。自分で動けない障がい者は、健常者と同じ土俵に立とうとしても、健常者に介護されている限りどうにもなりません。私にとって介護は「絶対的存在」です。私の身辺のこと、どこに何があるか、身体のこと、どこに行くかなど、全部してくれているのですから、私は内心怖いはずなのです。もし､介護の人に「もう何もしない」と脅かされると、私は 何も言えなくなるかもしれません。介護がいけない、誰々が悪い、というのではありません。

取材の中で小林さんが「介護者手足論」に触れました。私は、初めから、健常者を手足になんて考えていませんでした。人間には頭があり心があります。「障がい者の手足になりきる」なんてできるわけがないと思います。

障がい者の自由を奪っているのは、政治・まちづくりの仕組みであり、健常者社会そのものが障がい者差別だと言えるでしょう。健常者ばかりで作り上げた社会にはいろいろな差別があります。その社会を健常者と一緒に変えていくべきです。

介護をしながら同じごはんを食べるところから始まり、健常者自身が持っている差別意識を変えていくことで､差別はなくなるのだと私は信じていました。しかし、障がい者への差別は根強く、次々と障がいある人たちを苦しめています。障がいある人たちがいくら怒りをあらわにしても解決できないことはたくさんありました。今も施設の中で障がい者が虐待されたり、将来や介護を苦にして親の手によって殺されたりもしています。さらに、介護にかかる健常者の生活保障がされないことも問題です。

現在、「障がい者自立支援法」に基づいて介護保障はありますが、介護保険と同じで自己負担が発生します。自己負担金が払えない人は、やはり家族介護の負担になるのです。「人権」うんぬんと言われている日本社会で、まだ自由を取り戻せない者がいることに気づいてください。障がいがあるみなさん、関わるみなさん、考えてみてください。

小林：　現在は、年２回と発行間隔が延び、読者も減っていく中で、「必要とされていないのだろうか?」と自問することがあります。でも、この雑誌でないと伝えられないことがまだまだあるので、内容を吟味し、発行体制の見直しを続けています。

入部：　特集テーマは、どのように決めていますか?

小林：　私たちも苦労しています。個性的な生き方やおもしろい障害者運動が少なくなり、介護派遣などの事業中心の組織が増えています。取材先もテーマも見つけ難くなっています。

入部：その現状と障害者施策の充実は、関連していますか?

小林：　街に出ることによって出会いが生まれ、出会いによって、共に変るという願いから「そよ風のように街に出よう」というスローガンが生まれました。

当時と比べて現在は、街に出て、他人と出会う機会は増えました。地域生活もしやすくなり、施設や家族介護以外の生きる選択肢が広がったのは重要です。

介護保障制度がなかった頃は、介護者確保のために街頭に車イスを並べてビラを撒き、大学をまわり、人と会い、説得して社会との繋がりを作る必要がありました。

現在では、以前ほどの苦労は要りませんが、人や社会との接点が福祉関係者に限定されてくるという側面もあります。

さらに、「共にどういう社会を創るのか?」という展望が見えにくくなっています。社会運動が全体として停滞していますが、障害者運動もそうです。

差別に対する感性も変わってきました。障害者が入れない店があっても、昔ならその店に入りこんで問題を明らかにし改善を迫っていましたが、今は、バリアフリーマップで良しとするような運動になっています。

私が特に危機感を感じているのは、人間の誕生と死に関わる分野で「価値ある生」と「価値のない生」を区別する考え方が強まっていることです。出生前診断は、当たり前になっていますが、臓器移植も、家族の同意だけで可能となりましたし、15才以下も合法となりました。

親による障害児殺しも、「児童虐待」の一部として続いているのではないでしょうか。「青い芝の会」が批判してきた「優生思想」が、当時以上に世の中にはびこってきていると危惧します。

だからこそ、どんなに重い障害があっても、仲間を作って地域で生きている障害者を紹介し、「命の価値に軽重はない」ことを、事実として訴え続けたいと思っています。

新たな時代に
新たな言葉を

入部：　若い読者は増えていますか?

小林：　写真を多用し、見やすい工夫はしていますが、情報を求める先が、新聞・雑誌からインターネットに変わり、スピード感も違っています。かつては、原理原則に関わる古典や評論を読み、長い時間をかけて議論しましたが、今は、身近な新しい情報を集めて、敏感に反応するスタイルです。立ち止まってじっくり吟味するという思考そのものが、嫌われているようです。

入部：　制度・政策にしても、出された結論には関心を持つが、誰がどういう意図で制度を作り、どんな影響を私たちが受けるのか?という、根本的な議論には、興味が向かないようです。

小林：　制度・施策の議論は大切だけど、人間が生きている意味や価値にこだわって、「みんな、大きな可能性を持つ存在なのだから、その可能性をもっと追求しようよ」という呼びかけを続けるしかないと思っています。

若い協力者も編集部に入ってきました。どういう形にするのかまだ見えていませんが、新たな現実を見据え、思いを引き継ぎながら、新たな言葉を発していって欲しいと思います。

まねき猫通信では、2005 年から「障がい」の表記を使っていますが、この記事では小林さんの希望により「障害」とします。「障がい」は最近行政が好んで使用していますが､「社会の側のバリアの実態を隠蔽し、うわべの言い換えですませているだけだと思います」～とのこと。

当事者リレーエッセイ

何度でもチャレンジできることが大事なんちゃう

熊本市議
村上　博

驚異の就職率

ぷくぷく福祉会の理事長でもある馬垣安芳さんらを招き、私が実行委員長として11月下旬に行う「障がい者就労支援シンポジウム２０１０」の打ち合わせと現地調査を兼ね、10月中旬、大阪に行った。

「すいた障がい者就業・生活支援センター」を訪ねたとき、丁度、大阪府立たまがわ高等支援学校の先生が、職員研修の打ち合わせに来られていた。同支援学校は、４年前に少子化の影響で廃校になった高校をリニューアルしてできた学校だ。

最初の卒業生の就職率が８割、そして今年はなんと９割。一般の高校生たちが約５割だから、同支援学校の就職率がいかに高いかがわかる。橋下徹大阪府知事が同校を訪問し、取り組みを絶賛したとの新聞記事のコピーをもらった。理由は、入試による選抜。その後徹底した職業教育を行う。高い就職率が保護者には魅力（？）なのか、大阪市を除く府下の学区全域から応募があり、２倍近い競争率だという。

筆記試験、手先の器用さの試験、そして面接で選抜された優秀な生徒たちを就労に繋げるカリキュラムの成果なのだろう。

休憩したっていいやん！

それも、ありかもしれない。

だが、そんな優秀な障がい者ばかりではない。翌日、大阪で障がい者の就業に関わる人たちに会ったが、彼らは、「職業的」重度の人たちにどんな支援を行い、どうしたら就業に結びつけられるか、いかにして企業を開拓するかを、熱っぽく語る人たちだった。せっかく就職しても離職する障がい者だっている。「休憩したっていいやん！何度でもチャレンジ出来ることが大事なんちゃう」と語る。

高い就職率に驚く一方で、離職を「休憩」と表現する人たちの存在にほっとした。わが家の長男も、ずーっと「休憩中」だから。

カヌーフォーラム２０１０

以前、紹介した「障がい者カヌーフォーラム」を10月17日に行った。95年に熊本で開催した「車いす市民全国集会inくまもと」の分科会の１つとして行ったカヌーキャンプが、最初のきっかけ。以後２年毎に開催し、今回で８回目だった。

晴天に恵まれ、爽やかな秋風を身体いっぱいに受け、参加者たちは楽しそうに甲佐町緑川の川面で、色とりどりのカヌーを操っていた。当初、身体の人たちが中心だったが、前回位から、知的、精神の人たちがぐっと増えてきた。３障がいが一緒とはいえ、まだまだ社会参加のチャンスは少ない。

カヌーをうまく操り、してやったり！の彼らの笑顔を多くのボランティアに見てもらえ、いい１日だった。

第１回

食べものあれこれ

ぷくぷく給食委員会

清涼飲料水…飲み過ぎで糖尿病に

ほっと一息、飲み物は水分補給にも欠かせません。ただし甘いものは食欲不振や肥満にもつながるから要注意です。

清涼飲料水のペットボトル１本（500cc）に砂糖は 50 グラム入っています。3 グラムのスティックシュガーなら 17 本分。甘い炭酸飲料を何本も飲んでいるとエネルギー過剰で糖尿病を招きかねません。20 ～ 30 歳代の糖尿病が多くなったのは、清涼飲料水の飲み過ぎが原因で「ペットボトル症候群」と呼ばれます。

まぎわらしい甘さの表示

「微糖」「低糖」「甘さ控えめ」「無糖」など甘さの表記があります。無糖は「100 ｍｌ中の糖分が 0.5 グラム以下」と決まっていますが、他の基準はなくメーカによって異なります。

カロリーハーフなどと表記する場合には、何と比べて半分になってるのかを明確にしなければなりません。カロリーと違って甘さについては基準がないのでメーカーによって異なるというわけです。

ノンカロリーは言葉どおりカロリーゼロを指しますが、ノンシュガーの場合は砂糖のかわりにキシリトールやエリスリトールのような人工甘味料を使用している場合があります。これらは、砂糖よりカロリーは少ないですがノンカロリーにはなりません。

食品添加物について　その１

食品を長持ちさせたり、品質を向上させたり、見た目や香りなどを人工的によく見せるために、食品にはいろいろなものが加えられています。

◆食品衛生法での４区分◆

１．指定添加物…安全性と有効性を確認して国が指定したもの

２．既存添加物…長年使用されてきた天然添加物で国が使用を認めたもの

３．天然香料…植物、動物をもとにした香料

４．一般飲食物添加物…食品のなかで着色など添加物的な使い方をするもの

すべて合わせると 1500 種類以上も。

作ってみよう！

にんじんミルクゼリー（材料 1人分）

にんじんジュース 50 グラム／牛乳 50 グラム／砂糖 10 グラム／粉ゼラチン 2.5 グラム／レモン汁 2 グラム（少々）

①ゼラチンを水 10 グラムに振り入れ、５分ほどおく。ラップをかけずに電子レンジで 30 秒～ 40 秒加熱して溶かす。

②ボールに牛乳と砂糖を入れよくかきまぜて、砂糖が完全にとけたら、にんじんジュースをくわえてまぜる。

③　②のボールに①のゼラチンを加えてまぜ、レモン汁をいれる。中を水でぬらした型に流しいれ、冷蔵庫で固める。